

## 結果の表示

回答者

1 匿名

07:13

完了までの時間

### 1. 申請者氏名（所属・職名） \*

申請者の氏名・本学所属・職名をご入力ください。

例：東経太郎（経済学部・教授）

押川智貴（全学共通教育センター・特任講師）

### 2. 申請者メールアドレス（事務連絡用） \*

連絡が取れるメールアドレスをご入力ください。

[Redacted]

### 3. 推薦区分 \*

推薦区分を以下から選択してください。

- 自薦
- 他薦（推薦者）※専任教員
- 他薦（被推薦者）

### 自薦/他薦（被推薦者）

エントリー期間：2026年1月5日(月)00:00 ～ 2026年3月31日（火） 23:59

### 4. 授業科目名 \*

申請する授業科目名（※2025年度開講）を入力してください。

スポーツA(ニュースポーツ)

### 5. シラバス（URL） \*

申請科目のシラバスURLをご入力ください。

<https://portal.tku.ac.jp/syllabus/public/pubShowSyllabus.php?lcd=11024-036&year=2025>

## 6. 該当する達成基準 \*

申請科目が該当すると考える達成基準を以下から選択してください。

※複数回答可

- 全学や学部の3ポリシー実現に寄与する取り組み
- 授業実践における課題への取り組み
- 学修者主体の教育への取り組み
- 本学の教育の質向上に資する取り組みであり、他の授業の参考となる取り組み

## 7. 教育実践の目的・目標 \*

申請科目を通じて目指す教育目標をご入力ください。

本授業は様々なニュースポーツを教材として実施し、履修者が多様な他者と関わりながら良好な関係を築こうとする力を育むとともに、未知の事柄に対してもワクワクしながら取り組み続ける心構えを養うことを通して、スポーツに対する苦手意識を少しでも軽減することを目的とする。多くの履修者にとって未経験である様々なニュースポーツを実施することで、これまでの運動経験や技能差に左右されにくい環境となる。そのような環境のもと、チームスポーツを通して仲間と協力することや、互いを思いやる言動と行動の重要性を理解し、多様な他者と協働しようとする力の育成を目指す。また、未経験のことには失敗が伴うことが前提であるため、失敗を恐れずに未経験のことへ挑戦し続ける姿勢を養うことを目指す。さらに、競争のみを目的とするのではなく、気晴らしや遊びとしてのスポーツの価値に気づき、勝敗にとらわれずに参加する経験を通して、スポーツに対する肯定的な意識の形成を図る。

## 8. 取り組み内容 \*

申請科目における、独自の工夫や先進的な取り組みの具体的な内容をご入力ください。

本授業では毎回1種目のニュースポーツを実施する。各種目の難易度やルールの煩雑さに応じて、1種目につき1～3回分の授業を配当する。実施種目は、衝突などによる事故や怪我のリスクが低く、授業外においても気軽に実践できるよう、準備に手間のかからないものを中心に選定している。また、履修者同士が少なくとも2回以上同じチームとなるよう毎回チーム編成を変更し、チーム内での自己紹介をすることで、特定のメンバーに固定されない交流の機会を確保し、多様な履修者間の関わりを促している。

さらに、授業中には履修者の良好な発言や行動を積極的に取り上げ、「どのような行動が、なぜ良かったのか」を全体へ共有するピアフィードバックを実施している。これにより、協力的態度や思いやりある行動を具体的に可視化し、履修者同士が互いの良さを認識しながら学べる環境となる。加えて、授業シラバスへ「履修仲間が実技を楽しめるような思いやりが溢れる言動や行動」を評価対象として明示しているように、授業中もその実践を積極的に評価することで、失敗を恐れず挑戦しやすい心理的安全性の高い授業環境を意識している。

その他には、授業終盤には履修者による人気種目投票を実施し、最終実技回の実施種目を学生主体で決定している。これにより、履修者の意見を授業設計へ反映させ、主体的な授業参加意識を高めるとともに、自ら授業環境をより良く形成する経験を提供している。これらの取り組みを通して、運動技能の習得のみならず、協働性・主体性を育みながら、生涯にわたりスポーツを前向きに楽しむための基盤形成を目指している。

## 9. 具体的な成果 \*

取り組みを通じて得られた具体的な成果をご入力ください。

履修者間には個人差が見られるものの、他者に話しかけて会話することへの抵抗感を示す履修者は全体として減少した。各種目のプレーには多様な展開が生まれ、それが自然な会話のきっかけとなっている点大きい。また、「自分が失敗してチームに迷惑をかけるのではないか」という不安を抱く履修者も少なくなり、失敗しても気持ちを切り替えながら挑戦を続ける姿が多く見られるようになった。新しい種目では多くの履修者が同様に失敗を経験するため、失敗に対する心理的抵抗が軽減され、「今日は何を行うのか」と期待感をもって授業に参加する履修者が増加した。さらに、当初は自チームの勝利に執着していた履修者が、次第に自チーム・相手チーム関係なく好プレーを称え、上手いかなかった場面では共に悔しさを共有するようになり、勝敗にとらわれない温かな空間作りに主体的に関わる姿が見られた。

履修者数の推移からも、本授業に対する教育的評価と継続的需要が確認できる。開講初年度である2023年度前期は2コマ合計34名（8名・26名[定員各30名]）であったが、その後は2023年度後期56名、2024年度前期53名、2024年度後期54名と、定員に近い水準で安定した履修者数を維持した。2025年度には前期36名、後期42名となったが、3年間で275名が履修し、定員充足率は約76.4%である。これは、ニュースポーツという教材によって、スポーツ経験の有無に左右されにくい授業設計を行ったことで、従来からスポーツに苦手意識を持つ学生も含めた幅広い層の支持を得た結果であると考えられる。

また、14回授業曜日の学期において学修時間確保のために、最終実技回終了後に実施する「新しく気付けた自分」や「身に付いた能力」に関するレポート課題からは、教育効果が質的にも明確に確認された。多くの履修者が、「初対面の相手とも積極的にコミュニケーションを取れるようになった」「人見知りが緩和された」「他学部・他学年の学生とも自然に関係を築けた」と記述しており、コミュニケーション能力や対人関係形成力の向上が示された。さらに、「自分の苦手を周囲に伝えて協力を得る力」「失敗を恐れず挑戦する姿勢」「どうすればできるかを考える課題解決力」が身についたとの声も多く、心理的安全性を重視した授業設計が自己開示力・挑戦意欲・自己効力感の向上に貢献していることが確認された。

加えて、従来からスポーツに苦手意識を持っていた学生からは「ボールへの恐怖心が和らいだ」「運動が苦手でも楽しめることに気づいた」「勝敗だけでなく楽しむことそのものに価値があると理解できた」といった声が多く寄せられ、スポーツに対する否定的認識の改善にも顕著な成果が認められた。さらに、「状況判断」「役割意識」「戦略的思考」「周囲を観察しながら行動する力」など、スポーツ活動を通して培われた汎用的な能力についても多くの自己成長報告が見られた。これらは、ニュースポーツという未経験者同士が同じスタートラインに立ちやすい教材特性を活かすことで、履修者が自らの強みや新たな可能性を発見しやすい教育環境を構築できた成果であると考えられる。

以上より、本授業はニュースポーツを通して「スポーツへの苦手意識の軽減」「多様な他者との関係構築能力の向上」「主体的な挑戦姿勢の育成」、さらには「コミュニケーション能力・協働性・課題解決力・自己効力感」といった現代社会で求められる能力の育成において高い成果を挙げたといえる。また、生涯スポーツへの前向きな意識形成にも貢献しており、娯楽としての運動・スポーツが心身の健康へ与える好影響が重要視される昨今において有意義な成果を示している。